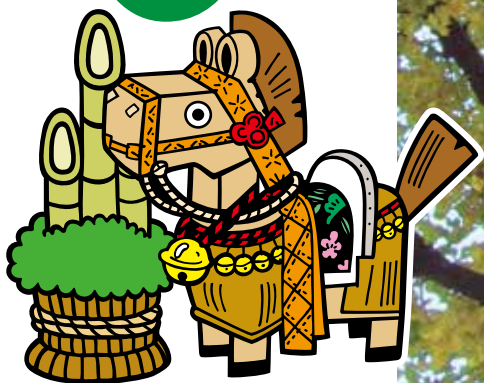


ちょっと気になる八王子マガジン

はち ちと ぴ



2026年 新風号

No.62

Take Free

〈ご自由にお持ちください〉



八王子市の木イチョウと市の鳥オオルリ（加藤岸男氏撮影）、
市の花ヤマユリ（田口秀夫氏撮影）

特集

八王子のシンボル

八王子の魅力はここにある

八王子のシンボル史

どこかで見たこと、きっとある

八王子の市章・木・花・鳥

八王子の新たな魅力を発信！

New Symbol はこれだ！

元気印の市民団体紹介

コラム 八王子の民俗誌⑧

コラム 八王子自然探訪④

私の本はこうして生まれた 其の六十二

八王子やまゆり咲かせ隊

「八王子」という地名のあゆみ 佐藤 広

八王子市の木・花・鳥に出会う 粕谷 和夫

『三宅島の風と光と水 — カノンのゆらぎ』 穴原甲一郎 著

八王子のシンボルというと、あなたはまず何を思い浮かべますか？ マークや建物、動植物など、人それぞれに「これだ」というものがあるかと思いますが。それぞれ思い描くものを聞いてみると、新たな気づきもあるのではないのでしょうか。そこで八王子の歴史を辿りながら、それぞれの時代、地域に登場した「八王子のシンボル」をまとめてみます。

八王子の魅力はここにある

八王子のシンボル史



自然のシンボル

古くから人びとは信仰の対象として、はたまた単なる道しるべとして、自然環境をシンボルとしてきました。たとえば八王子の大きなシンボルとして高尾山が挙げられます。市民の誰



◀高尾山の杉並木

もが一度は登ったことがあるであろうこの山は、古くから山全体が地域の信仰対象として崇められてきました。東京都の天然記念物にも指定されている杉並木は、薬王院のシンボルであると同時に、日本遺産「霊気満山 高尾山」のシンボルの1つでもあります。薬王院にご利益を求めた人びとは、諸願成就の返礼として杉の苗木を奉納し、その苗木で山林が守られてきました。また、こうした山林が多く動物が暮らしています。中でも昔から親しまれていたムササビは、高尾山を象徴する動物として日本遺産の構成文化財の1つにも選定されています。

小宮地区では、いまはなくなつてし



▲1970年代のお茶屋の松（瀬沼和重氏提供）

まったのですが、この地区に用水を開拓した際に建てられたお茶屋小屋の目印として「お茶屋の松」が植えられ、地域の人びとが落ちあう場所として活用されてきました（「はちとぴ」44号参照）。かつては市内各地域に、人びとの生活に根差した、その場所ならではのシンボルがあつたのです。

一方、八王子では市の木としてイチヨウ、市の花としてヤマユリ、市の鳥としてオオルリが制定されています（本誌p55〜7参照）。特に甲州街道の追分交差点から高尾駅前までに植えられているイチヨウ並木は、八王子ならではの風景として100年近くにわたって親しまれてきました。まさに市民にとってなじみのある「市の木」と



▲ノコギリ屋根（1986年、元横山町、風野康男氏提供）

いえるでしょう。



織物のシンボル

八王子のシンボルとして、「織物のまち」に関するものが多くあります。その1つが、のこぎりのようなギザギザの形をした三角屋根。これは安定して光を採り入れるための織物工場独特の構造様式で、こうすることで屋根に垂直に設けられた窓が北向きとなり、織物の日焼けを防ぎ、色や織・柄を正確に確かめることができたといえます。まちなかの織物工場から響いた「機屋の音」も織物のまちを象徴するサウンドといえるでしょう。

織物に関連した戦後のシンボルとい

塔の周囲の池から糸を表す5条の噴水が吹き上がり、塔を伝わる水が織物を表現していた



▲1963年の八王子駅前の織物タワー（風野康男氏提供）



▶八王子織物工業組合のTVC CM撮影（1963年、引間俊雄氏提供）

えば、なんといっても八王子駅前にあった「織物タワー」は欠かせません。1960年、八王子の玄関口に建てられた、高さ約12mの塔は、まさに八王子のシンボルと呼ぶにふさわしいものでした。塔の上部には八王子の市章、その下に「織物の八王子」とエンジ色の文字が描かれ、夜になるとネオンで文字が輝きました。

織物のまち、八王子で盛んだった絹織物を成すためには、蚕の食べ物、桑が必要になります。かつては市内のそこかしこに桑畑が広がっていたことから、「桑」を用いたシンボルも見られます。たとえば、学校に目を移すと、桑をかたどった校章が数多くあります。市内に69ある市立小学校のうち14校、中学校では37校のうち9校が桑の葉をモチーフにしています。

かつて八王子のまちなかにはいつも「織物」の風景があり、その風景に関連したシンボルが地域や学校で用いられてきたのです。

八

シンボルの多様化

1995年に八王子駅前の再開発により、「織物タワー」がなくなった後、駅前には風に舞う絹織物をイメージした「絹の舞」が設けられたほか、延伸したマルベリーブリッジの上には糸巻



▲八王子市観光PRキャラクターはっちおくじ

型のオブジェも建っています。ただ、市民に鮮烈な印象を残した「織物タワー」のように「誰もが納得できる八王子のシンボル」とは言い難いかもしれません。

また、八王子駅ビルのメインテナントとして1983年にオープンした「そごう」も、市民に親しまれたデパートとして八王子のシンボルといえるでしょう。残念ながら、惜しまれつつ2012年に閉店し、市内の商業の象徴的存在であったデパートはすべて姿を消してしまいました。

開発が進み、かつてのように織物産業が盛んではなくなり、均質化された建造物が増えた現代では、新たなシンボルを生み出すのは難しくなっています。

取って代わるように、近年はさまざま



▲うじてるくん

まな団体が新たなシンボルとして「ロゴマーク」を生み出しています（本誌p8、9参照）。また、高尾山の天狗を模した「はっちおくじ」や八王子城城主の北条氏照を模した「うじてるくん」などのキャラクターも続々と誕生しています。

ただ、多様なシンボルが数多生まれているために、逆に「八王子といえば、これ！」といえるシンボルを探することが難しくなっているといえるでしょう。八王子ならではの唯一無二のシンボルをつくり上げたり、見つけたりするのには困難な時代ではあります。が、「八王子」を象徴するモノは市内に確かに残っています。身近なところにあるシンボルを再確認することで、八王子の歴史や魅力を見つめ直してみませんか？

どこかで見たこと、
きっとある

八王子の

市章・木・花・鳥



多くのまちでシンボルとして掲げられている木・花・鳥。八王子市は何を選定しているかというと、それぞれイチヨウ、ヤマユリ、オオルリになります。また、市役所前の旗には八王子の市章、市のマークがいつも掲げられています。いずれも見覚え、聞き覚えがあるかもしれませんが、そもそもなぜ市のシンボルとして選ばれたのでしょうか。制定の経緯とともに、八王子との深いつながりをご紹介します。

市章

【1917年制定】



▲八王子市の市章

1917年9月1日、八王子町が市制を施行して「八王子市」が発足しました。

当時の新聞記事によると、市制施行の日は「天高氣清の秋日和」で、「男女職工は盛装して三々五々市中を徘徊し、一層の賑ひ」を加えていたといいます。夕方には提灯行列をするため、出発地の千人町に3000余人の人がとが集まり、臨時市長代理（後に八王子市初代市長）となった柴田榮吉を先頭に行進を開始。八幡町にあった八王子市役所において万歳三唱を行って、府立第四高等女学校（現都立南多摩中等教育学校）前より新町を一周して散会しました。ところが行進の途中で雨が降り始め、提灯は破れ、晴れ着を汚す者もいたといいます。

1か月後の10月1日には上野町の市

立八王子高等小学校（現市立第七小学校）で市制祝賀会が開催されました。前日には余興として全国花火大会も開催予定でしたが、夜半から明け方にかけて大型台風が上陸し、会場となる浅川が増水したため翌2日、3日に延期となってしまいます。この花火大会も近郷近在から多くの見物客で賑わいました。

祝賀会は大変な賑わいを見せ、その際商店街につるされた軒提灯に描かれたマークが正式に八王子の徽章（市章）として定められることになりました。

デザインの由来は見ての通り「八王」を图案化したもの。この市章を示した市旗は2008年に、縦横比は2:3、地色を紫、マークを白抜きにし、中央に配置。そしてマークの直径は旗の縦の長さの60%、線の太さは旗の縦の長



▲八王子市役所にはためく八王子市旗

さの7:5%とすることが定められています。現在、市章は式典などで掲げられる市旗や、さまざまな行政書類のほか、マンホールのふたなどでも使用されています。

市の木 イチョウ

【1976年制定】



▲甲州街道沿いのイチョウ並木

は随筆「街路樹」の中で次のような一節を残しています。

同じ形の幹は白つぼく目立つて、広い国道の両側に井然と列作つて何か柱の立並んだかのやうで、これがどこまでも続いて見えた。此所は甲州街道と云はれ、八王子から浅川まで、長い長い一直線の国道で、道のり約一里余りの間に、両側に銀杏の並木が正確に絶え間なしに続くのだ。

ここに描かれているのは、1927年に多摩御陵の造営を機に植えられた、追分交差点から高尾駅前までの甲州街道沿いに続くイチョウ並木です。市内には他にも、甲州街道の明神町から大和田町にかけての道路沿いなどにもイチョウ並木があります。

市制60周年を記念して「八王子の市の木・市の花を選ぶ会」が選んだクワ・ヤマザクラ・モミジ（イロハモミジ）・カシワ・イチョウの中から、市民の投票で市の木として選定されました。

1979年からはイチョウの葉の色づく11月に、市民手づくりの「いちょう祭り」が開催されています。

中国原産のイチョウ科の落葉高木で、中国では昔から「公孫樹」と慕われています。雌雄異株で、種子の「銀杏」は、臭いが強いものの、栄養価の高い食べ物として知られています。風土に左右されないため、日本全域で見られ、病害虫が少なく、耐火性があり、姿が良いことから秋に黄葉する街路樹として各地で植えられています。名前の由来は、葉型が鴨の足に似ているところから中国語のヤーチャオ（鴨の足）という説や、一枚葉（一葉）という説など諸説があります。

八王子市名誉市民の作家、瀧井孝作

イチョウ探索隊

いちょう祭り（「はちとぴ」15号参照）、いちょうホール（本町、「はちとぴ」61号参照）、いちょう塾（「はちとぴ」7号参照）、東京八王子いちょうライオンズクラブ、いちょう公園（寺町）、旭苑のお菓子（銀杏パイ・いちょうまつり） etc

▶大塚神明社のイチョウ
由木東市民センターに隣接する
梶川緑地に立つ



▲千人町の御菓子司 旭苑のお菓子
（銀杏パイ・いちょうまつり）



▶いちょう祭り
毎年11月第3土・日曜日に
開催される秋の風物詩



▲いちょう塾パンフレット



▲いちょうホール
大ホールの座席はイチョウ並木が
黄葉するイメージで配色している

市の花 ヤマユリ

【1976年制定】



▲ヤマユリ（田口秀夫氏撮影）

植栽は格別の難しさがあります。花言葉は「荘厳」「純潔」。

かつては市内の里山に自生し、そこかしこで花を咲かせていましたが、ただけでなく、食用としてもなじみのある植物でした。魅力ある花だからこそ、林業を営む人たちは下草刈りをするときに花を間違つて刈り取らないよう、大変気を配って仕事をしていたといひます。市の木選定と同時に、市制60周年を記念した「八王子の市の木・市の花を選ぶ会」が選んだキキョウ・ヤマブキ・リンドウ・アジサイ・ヤマユリの中から、市民の投票で市の花として選定されました。

日本特産のユリ科の多年草で、東北や関東、東海地方を中心に広く自生しています。歴史ははつきりしませんが、画家や書家の作品から江戸時代初期には現れたものと思われまふ。山や丘陵の日当たりの良い斜面に生え、高さは約1〜1.5m、花径が25cm程度になり、ユリ属の中でも最大級です。

毎年7月ころ、白色で内面に黄色のすじと赤茶色の斑点のあるラッパ状の花を横向きに咲かせまふ。花には強い芳香があり、球根は食用として蒸し物の具、煮物、菓子などに用いられます。観賞用として栽培もされていますが、

また、「八王子やまゆり咲かせ隊」の活動により、市役所や山野、各家庭などでヤマユリの花を咲かせる活動が行われてきました。獣害などにより植生は限られてしまひました。現在は高尾山や陣馬山などからうじて見ることができます（本誌P10参照）。

ヤマユリ探偵団

やまゆりセンター（八王子市勤労者福祉サービスセンター）、川口やまゆり館、土産処やまゆり（高尾山清滝駅の売店）、やまゆりの小径（戸吹クリーンセンター敷地内の散策路）、八王子市職員等退職者会の会報「やまゆり」、旭苑のお菓子（やまゆり）…… etc



▲土産処やまゆり
高尾山清滝駅の売店



▲八王子市職員等退職者会が発行する会報「やまゆり」

▲旭苑のお菓子
（やまゆり）



▲やまゆりの小径
戸吹クリーンセンター敷地内にある散策路



▲川口やまゆり館
生涯学習センター、図書館、市民センターを併設

市の鳥 オオルリ

【1991年制定】



▲オオルリのオス（加藤岸男氏撮影）

スズメ目ヒタキ科の小鳥で、主に山地の溪流沿いの林に生息しています。九州以北に東南アジアから渡ってくる夏鳥で、大きさはスズメより少し大きい16・5cm。オスは頭から背、尾にかけて鮮やかな青色、喉から胸は黒色、腹は白、メスは頭から背にかけて茶褐色をしています。オスは繁殖期に沢筋の高木の頂に止まり、よく通るきれいな声でさえずります。鳴き声は「ピーリー・ピー・ポイ・ヒーピー・ピールリ・ジェツジェツ」など、複雑な節回しになるのが特徴。美しい姿と声を楽しめるので、ウグイス、コマドリとともに

日本三鳴鳥の1つとされています。

オオルリは夏季になると高尾山や陣馬山などで見られます。八王子カワセミ会（現八王子・日野カワセミ会）が1991年に「市の鳥制定に関する要望書」を提出したことをきっかけに、同年市制75周年を記念して市の鳥を制定することになりました。会としては「市民の身近な自然環境を象徴する鳥」を要望したのですが、選定にあたって組織された八王子の市の鳥を選ぶ会としては「高尾山の観光に結びつけて、姿・声が良い珍鳥を選んだほうが市の宣伝になる」という意見があり、必ずしも市民にとって身近とはいえない鳥も含んだブッポウソウ・オオルリ・ヤマセミ・カルガモ・イワツバメの5種類を選定。その中から市民投票で選ばれたのがオオルリでした。

八王子・日野カワセミ会では現在も継続的に姿や声を確認して、その数を数える定期カウント調査を実施しています。オオルリは自然環境が豊かな所でないと生きていけないため、その生息環境を守り、自然豊かなまちのシンボルとなるよう活動が続けています。

オオルリ探検部

おおりの家（タヤけ小やけふれあいの里の宿泊施設）、八王子市シルバー人材センターの会報「おおり」、八王子消化器病院の広報誌「おおり」、おおり展（市立小・中・義務教育学校合同作品展）、読書のまち八王子のシンボルマーク「るりちゃん」、市のリサイクルマスコット「クルリ」 etc



▶オオルリのメス（加藤岸男氏撮影）



▲八王子消化器病院の広報誌「おおり」



▲るりちゃん



▲おおりの家
タヤけ小やけふれあいの里の宿泊施設



❖「あなたのみちを、あるけるまち」とは

ブランドとしての八王子市を内外にアピールするキャッチコピーを作るべく、2018年に立ち上がった「八王子ブランドメッセージ つくろう・えらぼうプロジェクト」。そこに参加した公募市民がワークショップなどを通して4つの候補を作成した。市民を対象にブランドメッセージ総選挙を開催したところ2万5千もの投票があつたが、その中から特に支持率の高かった言葉として選定された。

❖ロゴの意味

都会と自然がほどよく調和

あなたのみちを、あるけるまち

作 八王子市広報プロモーション課
 制定 2019年3月

する八王子は、十人十色のライフスタイルが実現できるまちでもある。その楽しい要素をカラフルな4配色で表現し、文字は手書きで起こし、1文字1文字をランダムに組み合わせることで、ポップで明るい雰囲気表現。また、八王子の「八」という文字を足に見立てて、どこでも歩けそうなブーツを履かせることで「あるけるまち」を演出。

❖色の意味

緑色は高尾山をはじめとした豊かな自然、青色は市内を流れる大きな川や広々とした空、オレンジ色はまちのにぎわい、グレーは交通網や道路網など都市の便利さを表現。

これだ！

現代は新たなシンボルが次から次へと生まれる時代。あなたもまちなかで八王子に関するロゴを目にしたことはありませんか。また、よく見かけるけれど、何のマークか分からないといったことはありませんか。ここでは最近八王子で生まれた新たなシンボルマークを4つご紹介。これからの八王子に欠かせない情報がギュッと詰まったデザインをご紹介します。

❖「MICE」とは

企業などの会議 (Meeting)、企業などの行う報奨・研修旅行 (Incentive Travel)、国際機関・団体などが行う国際会議 (Convention)、展示会・見本市・イベント (Exhibition/Event) の頭文字をとった造語で、多くの集客交流が見込まれるビジネスイベントなどの総称。地域外から目的を持った人々が集まり、滞在することで交流人口を増やして宿泊や食事、土産品の購入、さらには会場設営や警備など、非常に裾野の広い経済効果を生み出すことが期待される。



❖「八」の意味

八王子の豊かな自然の象徴である「高尾山」と都市機能をイメージさせる「街並み」をモチーフに、八王子の「八」と未来や先進性を示す「矢印」を表現。

❖色の意味

八王子市の木「イチヨウ」が黄葉する様子から、緑色と黄色を採用。緑色は自然・環境・調和・安心・エコロジーを、黄色は光・太陽・活発・活性・コミュニケーションをイメージ。



八王子商工会議所の檜崎博
会頭が郷土愛を表現するため
に就任以来、キャッチフレー
ズとして使用してきた言葉。
商工会議所屋上の大型デジタ
ルサイネージ「八王子が1番
ビジョン」や、会員企業を紹

❖「八王子が1番」とは

八王子が1番

作 八王子商工会議所
制定 2021年10月



介するJ・COM八王子の番
組「八王子が1番TV」など
でも使用されている。シンボ
ルマークの制作は日本工学院
八王子専門学校の協力を得
て、学生から作品を募るコン
テスト形式で選考を開始。夏
休み期間中に制作された45点
の応募作品から3点を選び、
その中からプレゼン発表会を
経て選定された。

❖ロゴの意味

「八王子が1番」をシンボ
ルマーク化し、躍動感のある
「靴」と「手」で印象に残り
やすいデザインを意識。

❖色の意味

八王子カラーとして黄緑
(自然)、オレンジ(街の賑わ
い)、水色(川や空)、灰色
(都市)を配色。

ニュー シンボル New Symbol は

「霊気満山 高尾山」人々
の祈りが紡ぐ桑都物語」
は、2020年に八王子市が
東京都で初めて国から認定さ
れた「日本遺産」のストー
リータイトルである。八王子
は戦国武将の北条氏照が滝
山・八王子城下で進めたまち
づくりを「礎」として、絹産
業を基盤に甲州道中最大の宿
場町へと発展。そこから「多
摩織」「絹の道」などの絹産
業にちなんだ文化財が生まれ
た。養蚕が盛んに行われてい
た江戸期以降の市内には桑畑
が広がり、まち全体が織物取
引などで賑わう様子を、八王

❖「日本遺産『桑都物語』」 とは



子を訪れた人々が「桑都」と
呼ぶようになった。「桑都物
語」は、そんな八王子の歴史
と桑都の文化・伝統の魅力を
発信し、未来へと継承する取
り組みとして展開している。

❖ロゴの意味

日本遺産「桑都物語」をプ
ロモーションする際に統一感
をもつて展開することを企図
し、「桑都」にちなんだ桑の
葉をモチーフにしたロゴマー
クをデザインした。

❖色の意味

連綿と連なる「桑都」八王
子の歴史を未来へと紡ぎゆく
瑞々しさをイメージした「桑
都グリーン」を交えて設計。

日本遺産 『桑都物語』

作 日本遺産「桑都物語」
推進協議会
制定 2021年12月